

## 呉正根「東日本大震災を通して見た日本と韓国とのこれから進むべき道」

結婚式を1週間残した2011年3月11日。妻と私は、韓国で結婚の準備に余念がなかった。韓国の伝統衣装を注文した後、午後2時頃、遅い昼食を食べるために食堂に入ったときにテレビでまるで映画のような場面が演出されていた。3月11日大震災と巨大な津波がそれだった。直接テレビで見ながら、私は自分の目と耳を疑わざるを得なかった。そこはこれから1週間後にある結婚式を終えて行かなければならぬところ、まさに日本だからだ。大震災の放送が終わってから家族や親戚、友人にも電話が相次いで殺到した。これからどうするつもりなの？日本留学をやめて欲しいという話が電話機から聞こえた。その当時、私は博士課程を開始して1学期を終えて冬休み期間に結婚準備をしに韓国にきた時期であった。私は日本の帰国を控えて、今後の進路について多くの悩みが大きくなって行った。連日ニュースで騒ぎ立てる余震と放射能の被害は私と周りの人々だけでなく、韓国の人々にも緊張感を作り出すに十分だった。一方では、妻と妻の家族にすまない気がした。特に妻の家族と親戚たちには何の罪のない子羊を戦場に連れて行くという感じを与えたかもしれない。しかし、日本に行くことに決心したのは、韓国の報道と日本の実際の状況は異なるという判断であった。自然災害の事前予防は人の力では不可能であるが、災害以降の対応する日本の力を信じていた。

### トンネルの中に入った電車は絶対に止まらない。

果たしてこの災害を日本人たちはどのように受け入れるだろうか。どのような視点でこの惨事を見るものであり、どのように対応するのか。

大地震と津波が発生した2週間後、日本に到着したときに私は日本人の物静かにもう一度驚かざるを得なかった。地震について詳しく知らないが、大きな地震が発生すると地殻変動が発生し、このとき地殻が元の状態に戻るときに余震が発生するようになるという。場合によっては、元の地震よりも大きな余震が来る可能性があるため、余震に備えて、生活必需品などを用意しなければならないのだ。こんなに国家的なレベルの災害が発生すると、国全体が混乱に陥って無秩序が起こるはずだ。それでも日本では買いだめもなく、割り込みもないなど、むしろいつもよりも落ち着いて危機を克服していた。配給を受けようと列をつくったが足りないというどんを他人に先に配慮する日本人たちを見て、英国のフィナンシャル・タイムズは「人類の精神の進化」という絶賛もはばからなかった。日本人特有の落ち着きを以って「がんばれ日本」というスローガンを元として、順調に進行されていった。また、国民たちが国の政策に順応する態度を見せたが、最も努力を傾けたのは電気の節約であった。公共の場所の電灯だけでなく、国家機関や大学の研究所などでは一斉に電気の節約が開始され、これに文句を言う人々は一人もいなく積極的な参加の意志を見せた。

一方、放射能の負の恐れも押し切って、被害復旧作業をするために現場に行くことを躊躇

躊躇しないボランティアも増えていった。私本人は直接参加しなかったが、通っている韓国人教会で行う被害復旧作業と募金活動にも積極的に参加した。全国民と現地の外国人が一緒にこの困難を克服していく時点で、もうひとつの感動の波が徐々に近づいていた。

## 津波後、支援の津波

日本の地震報道が世界各地に広がると各国での募金活動が活発に起こり始めた。しかし、私は日本の地震を通して感じた最も驚いたことは、韓国からの積極的な支援であった。東日本大震災が発生すると、韓国政府は "近くて近い隣人" として、日本の事態収拾・回復のために積極的に支援してきたが、民間レベルでも自発的な募金と救援物資の用意などを通じ、日本を支援した。また韓国政府は、日本政府の要請に応じて、2011年3月12日に救助犬2匹と救助隊員5人を外国救助隊としては最初に派遣し、2011年3月14日に102人の救助隊を追加で派遣して、救助活動を実施した。韓国は政府レベルの支援以外にも、赤十字社などの救護団体、地上波放送局、ポータルサイトなどを通じた募金運動を展開した。そういう助けの内訳を書いたのは誇りとしようとするものではない。また積極的な協力は韓国だけではないだろう。しかし、1世紀にわたる日本と韓国の対立と利害関係はこの期間中に見つけることができなかった。何よりも人間の命は大切にすること、人間は守られなければならないこと、このような考えこそ我々が一緒に悲しんで一緒に笑って一緒に暮らしていく同じ人だということを感じるようにしてあげることができる。

現在独島を巡る領有権主張により、日本と韓国との葛藤がますます深刻化されている。これを解決するためには、まずお互いの理解と配慮をベースとした歴史意識が先行されなければならない。それと同時に、過去の歴史にのみ偏っておらず、将来の歴史を作ることも重要である。東日本大震災の時と同じように韓国と日本が次の世代のためにどうすれば共存ができるかを考えた上で、その考えを実践することは、今の金銭的な利益とは比較もできない大きな資産になるだろう。人間との愛情を如実に見せてくれた東日本大震災の大切な物語を通じ経験した思いやりを、これから日本人だけでなく韓国人たちにも加えながら生きることを望む。